

# 序

現在の臨床医学は新しい治療法、治療薬が日々開発されており日進月歩です。私たち臨床医は、最新の医学知識・エビデンスに遅れをとらないように日々焦燥感を抱えながら走り続けています。その一方で、臨床医学では今も昔も変わらず重要なテーマが数多く存在します。感染症診療でのグラム染色を中心とした微生物学診断にこだわる姿勢や、血液ガス検査の解釈、意識障害へのアプローチなどのテーマは、おそらくこの先もずっとその内容が大きく変わることはないのではないかと思います。今後AIがいくら進化したとしても、病歴、身体所見をとり、基本的な検査結果を正しく解釈して総合的に診断、治療へアプローチするという臨床スタイルはずっと重要であり続けると私は信じています。

本書は研修医の先生方を対象として、病棟・救急外来でこの先もずっと役立つ内科の重要なテーマを選んでまとめたものになります。本書の執筆には約2年を要しましたが、内科医としての未熟さが露呈してしまう「恥ずかしさ」と少しでも後輩に役立つ書籍が提供できればという「淡い期待」の入り混じった複雑な感情を抱きながら執筆をつづけていました。治療に関しては遅れている内容があるかもしれないし、最新の技術は紹介できているとは決して言えません。また普段私が診療しない腫瘍、間質性肺炎、肺高血圧症などのテーマに関しては全く扱っていないため物足りなさを感じる点も数多くあると思います。一内科医の足掻きに過ぎないかもしれませんが、本書が研修医の先生方にとって少しでも内科診療を学ぶ足がかりになることができましたら幸いです。

最後に本書の監修をしてくださった塩尻先生、これまで多くをご指導いただいた先生方、切磋琢磨した同僚、一緒に眠い目をこすりながら当直を戦った後輩、いつも支えてくれた看護師さんをはじめメディカルスタッフや事務の方々、辛抱強く尽力してくださった羊土社の方々、優しく支えてくれた家族、そして何よりこれまで多くを教えてくれた患者さんへの感謝を込めて本書を献じます。

2022年1月

武蔵野赤十字病院 神経内科  
杉田 陽一郎